

## 【認知症と、仕合せがもたらす“幸せ”】

小野田真由美 介護施設勤務

95歳で家事を始めたという、信友さんのお父様。私の祖父は90歳の時でした。祖母との2人暮らし、大正生まれの祖父は亭主関白を絵に描いたような人。そんな祖父が台所に立っていたという事実を知ったのは、亡くなった後のことでした。部屋から見つかったチラシの裏に書かれていたのは、大量の「献立」。認知症の症状が出始めていた祖母のために、料理を作っていたようなのです。そして、たんすの中からは、祖母に宛てた手紙も。つづられていたのは「ありがとう」の言葉。人生の最期、認知症は2人に、小さくて尊い“しあわせ”を残したのかもしれません。

辞書には掲載されていない「幸せ」。載っているのは「仕合せ」＝巡り合わせ。「こりゃ運命よ、定めじゃ」と、家族が認知症と巡り合ったことを真っ向受け入れ、104歳の今も穏やかな表情を見せてくださったお父様。直子さんの横で、とても幸せそうでした。「分からん分からん・・・おかしいね、迷惑かけるね」と気持ちを吐露されたお母様。「迷惑かけてないよ、邪魔じゃないよ」と涙声で伝えていた直子さんとのやりとりにも幸せが見えました。過酷な運命を乗り越えた時に芽生える喜びを「幸せ」と言うなら、この認知症はとても不思議な病だと感じます。

その不思議を前に、霧がかっていた私の視界。そこに薄日が射しこんだのは、今夜“恩蔵さんワールド”に誘われたから。脳の中を、これほどチャーミングに見せてくださったのは初めてです。自我が脅かされているからこそ「不安」が強くなる。一方で、不安が強くなるから、大切なものや「幸福」が濃くなる。消されてしまう記憶もあれば、病にも決して奪えないものがある。体は覚えている、感動する心もある。海馬を傷つけない方法は分からなくても、認知症に抗うために自分で作れるお薬は一つ。「しあわせ（感動）」の瞬間を貯めていくこと、アタッチメントできる存在を作ることだと教えていただきました。

統計だけでは分からない認知症の不思議は、山のようにあります。それでも、科学者の皆さんが、解明し導いてくださることもたくさんあると思います。私は、勤務するグループホームで、お一人お一人の「その人らしさ」を見ていきます。過去を思い出し繰り返し語ることは「幸せ」な感情を生じさせることであり、今を生きる力になる。忘れずにいます。

素敵なえにしを、ありがとうございました。